

検証・歯科医学史の書誌^{*1}

—先史時代を記した歴史家たち—

医の博物館 中原 泉 樋口輝雄^{*2}

要旨：歴史は常に勝者のものであり、かつ後世の識者の脚色により歪曲された史伝が定説化していく。そこで、歯科医学史の書誌を検証すると、偏向と過褒という同様の傾向がみられる。それは、史実は客観的に過不足なく記録し、客観的に過不足なく評価することを、私ども後世史家に戒めている。
キーワード：歯科医学史、歯科医学史書誌、歴史家、通史、列伝

歯科医学の通史

東京歯科医学専門学校の奥村鶴吉は、大正6年(1917)、同校の歯科学講義シリーズの一巻として、『歯科医学史』¹⁾を上梓した。同書の緒言で彼は、ガイスト・ヤコビ、ルメール、米国歯科医学協会、グリニーの洋書4冊を挙げ、「殊にグ氏の書は、最も信頼すべく18世紀の終わりまでを詳論せり」と記した。奥村は、このグリニーの著を抄訳し梗概を述べた。学生用の講義録であったから、32ページの小冊である。

つぎに、日本大学歯科の川上為次郎(東京歯科医学院卒業)は、昭和6年(1931)、『歯科医学史』²⁾704ページを出版した。同書の自序で彼は、わが国の歯科医学史は奥村の概論しか見られないので、先進学者ゲリニの研究を編修纂輯したと記した。同書は訳本でも自著でもなく、ゲリニ著を編んで西洋の歯科医学史を叙述した通史である。ただし、最終章の「日本に於ける歯科医学の発展」49ページは、彼が加筆した。

ここで奥村のいうグリニー、川上のいうゲリニは、イタリアの歯科医学史家 Vincenzo Guerini である。「古代から18世紀終わりまでの」と副題した

彼の著書『A History of Dentistry』³⁾は、1909年(明治42)に出版された。同著は、英文で索引をふくめて355ページ、図版124葉の名著である(図1, 3)。

斯く、わが国の歯科医学の通史は、Guerini 著を典拠とする川上著が定本とされる。以後の類書はこれに準拠し、それを越える通史はみられない。

ただし、日本歯科医学専門学校の山崎清は、昭和15年(1940)、『歯科医史』⁴⁾182ページを出版した。彼は同校の中原實から、欧州における R. Boissier の著書などの資料を譲られ、それをもとに欧州を主体としたユニークな歯科医学史を著した。

先人たちの列伝

わが国の歯科医学の史伝(歴史と伝記)は、昭和15年(1940)日本歯科医師会発行の『歯科医事衛生史前巻』⁵⁾592ページが定本とされる。同書は、「近世歯科医術の輸入より明治三十九年歯科医師法公布に至るまで」と副題し、歯苑社(現・医歯薬出版株式会社)の今田見信(東京歯科医学専攻校卒業)、日本大学歯科の山田平太(東京歯科医学専門学校卒業)が、明治元年から同39年までの事蹟と列伝を編纂した。

今田は「前巻」の執筆に際し、『歯科沿革史調査資料』⁶⁾106ページを下敷とした(図2, 3)。同書は、大日本歯科医学会より昭和と改元された大正

*1 Bibliographical Study on the Japanese History of Dentistry

*2 Museum of Medicine and Dentistry
Sen Nakahara, Teruo Higuchi

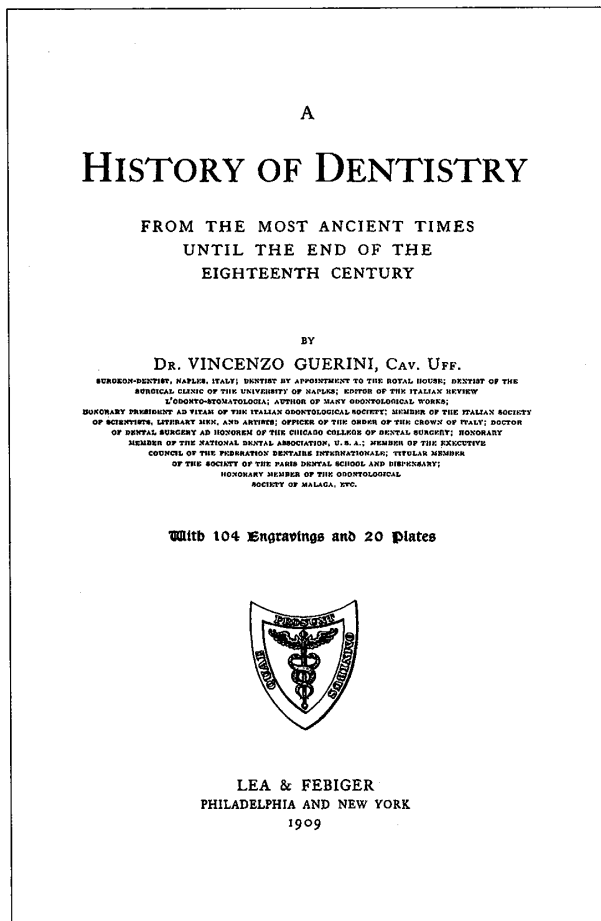


図 1 通史の原典『A History of Dentistry』扉

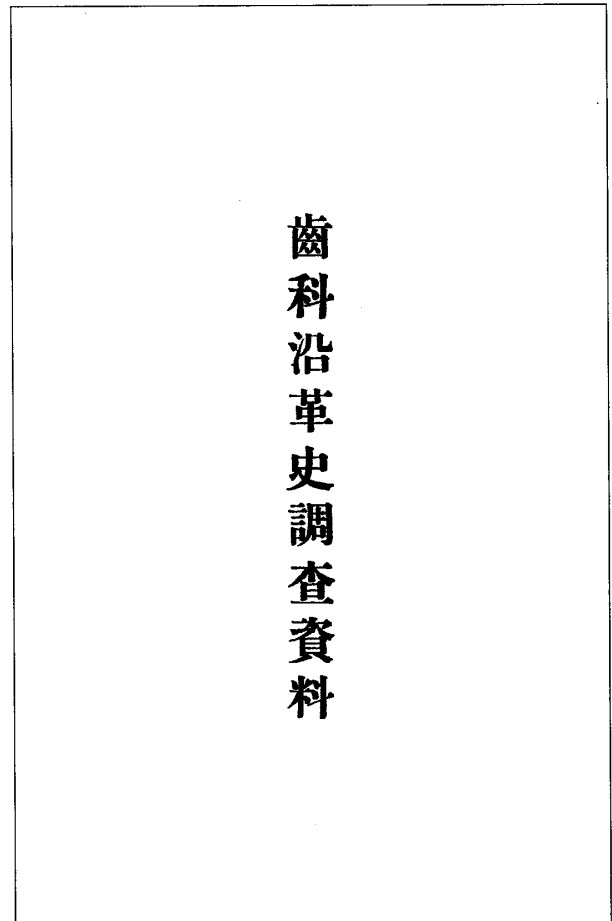


図 2 列伝の底本『歯科沿革史調査資料』表紙

15年(1925)12月25日に発行された(「前巻」の凡例に、「昭和6年12月出版」とあるのは誤記)。この沿革史の調査は大正4年から始められたが、10年余の曲折を経て、榎本積一の遺志による寄附を基金とし、高橋直太郎が編集・発行者となり、非売品200部を印刷した。

調査対象は明治18年までとし、外国人5名、日本人44名の先人の小伝等を収載した。外国人は、アメリカ人4名(うち1名は英国人の帰化)、フランス人1名である。また日本人の内訳は、明治17年以降に医籍登録された内務省免状所持者(旧試験及第者)25名<歯科22名、口中科1名、内外科2名>、従来開業医(各府県よりの仮免状者)6名、同18年に各府県の「入歯齒抜口中療治接骨営業者等取締規則」に基づいて営業鑑札を付与された入歯齒抜口中療治者12名、そして本邦の最初の歯科器材輸入商の清水卯三郎である。

のちの『歯科医事衛生史前巻』には、アメリカ人のヘンリー・ウキン、また香港でイーストレーキに学んだ安藤二蔵、欧米で西洋歯科医術を修め

た留学組の伊澤信平、一井正典、石原久、および高山門下の榎本積一が追加され、大道芸人であった松井源水と長井兵助は除外された。

「調査資料」の列伝を一覧すると、外国人ではW・St・G・エリオットがもっとも長文で、W・C・イーストレーキの2倍に及ぶ。日本人では、小幡英之助と高山紀斎の記述が、群を抜いて行数を費やした。

小幡は、東京医学校に初めて歯科試験を出願し合格した事績が高評される。彼は、栄誉ある歯科医術開業試験委員も宮内省侍医も固辞した。「資性頑固にして憚るところなく、人を見れば擲揄一番其の人窮すれば呵々と大笑す」と酷評された。

対蹠的に高山は、私立高山歯科医学院を創立した事績が高評される。彼は、日本歯科医会・大日本歯科医会の会長を5年、歯科医術開業試験委員を15年余、宮内省侍医局勤務を35年余にわたって務めた。「資性諒厚にして其の行動常に武士的精神に則り、殊に身を持するに謹直にして最も報国の志に富む」と高評された。

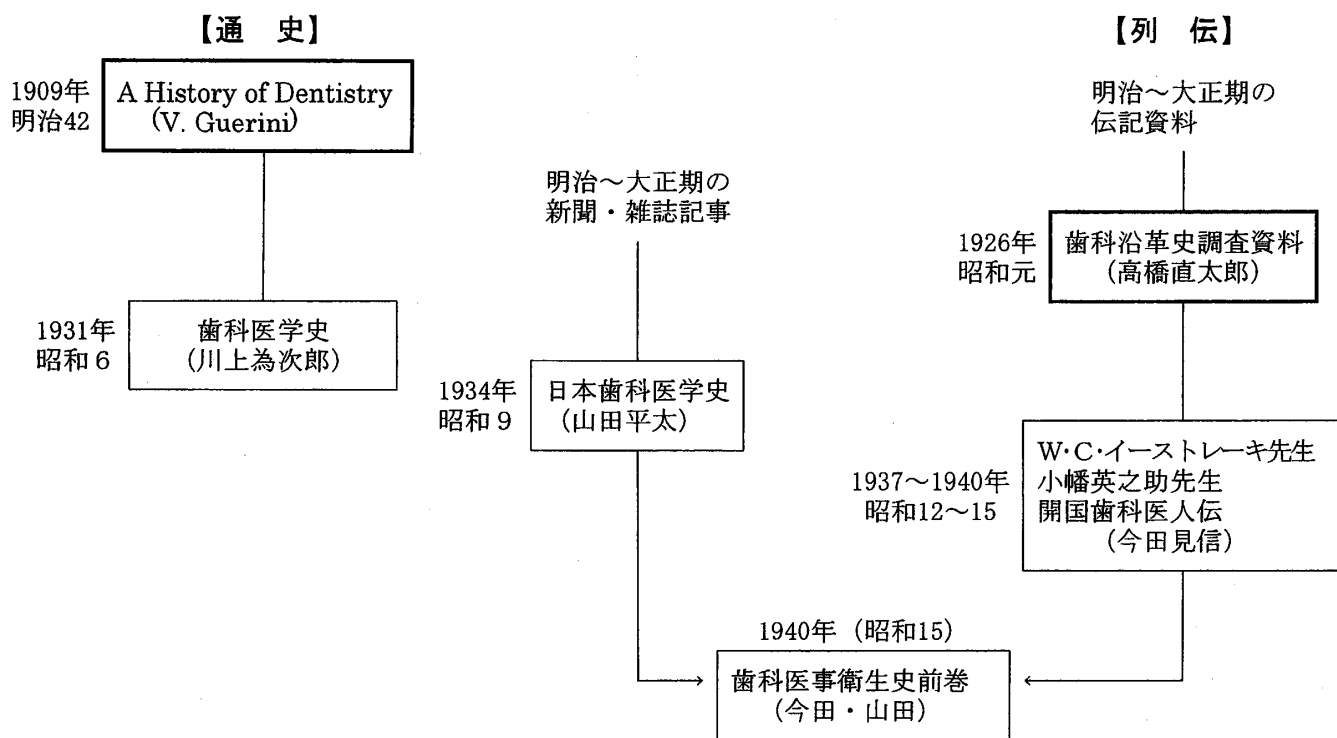


図 3 歯科医学史書誌の系列

「調査資料」は、巻末に「以上の記載の各伝記中訂正，或は増補を要する個所を発見せられし場合は，随時事務所迄御申越しを乞ふ」と後記した。列伝がまだ調査中であり，かつ基礎資料が関東大震災で焼失したため，未校訂のまま上梓したという事情を窺わせる。

その断わり通り，同書には処々に誤まりや洩れがみられる。その看過できない幾つかを挙げる。

小幡英之助の稿には，彼が東京医学校の歯科試験に，「答弁流るゝが如くにして試験官を感動せしめたり」と記される。この有名なエピソードは，これを原本とする。しかし，樋口の検証により，実際には小幡の成績は中の上（五等中の三等）で，並みの及第点であったこと，また彼は侍医就任を懇望していたことが判明した⁷⁾。この脚色された挿話は，史話としては興味深くて，史実を意図的に歪曲していると言わざるをえない。

高山紀斎の稿には，「二十三年一月高山歯科医学院創立せらる…本邦最初の歯科医育所とす」とある。しかし，わが国最初の歯科医育機関は，医師の石橋泉と従来家の久保田豊が，明治21年3月に東京市京橋区に創立した東京歯科専門医学校を嚆矢とすることは，確定している。

また，高山の稿は，彼が10年足らずで学校経営を放棄し，明治32年に血脇守之助に譲渡したと

いう，歴史的に重要な事柄については触れていない。

つぎに，高山の稿には，高山歯科医学院講義録について記述する。その一卷である『歯科学術沿革史』⁸⁾333ページは，近世歯科の器械材料，治療等を解説した。同書には「高山紀斎講演・神村信吾筆記」と記され，高山の学識を口述筆記したと読める。実際には，米国歯科医学協会が1876年（明治9）に出版した『A History of Dental and Oral Science in America』270ページをそのまま直訳したものである。しかし，底本がある旨は明記していないので，学徳上からいえばアンフェアである。

神翁金齋の稿では，彼が主催する私塾の大日本歯科講義会が，「…丸の内商工学校に移るに及び，名を共立歯科医学校と改めたり。後また神田雉子町に徙る。この学校は後年中原市五郎の手に帰せしが…」とある。しかし，中原市五郎は自ら，明治34年に私立歯科医学校の設立を企図して二十日会を結成し，のちに日本歯科教育会に改組して学校設立事業に邁進し，同40年に東京市麹町区大手町に共立歯科医学校を創立した。同校設立は，中原市五郎の主導と献身によるもので，神翁金齋は日本歯科教育会の7名の理事の一人にすぎない。

このように「調査資料」には、誤りと洩れがあるものの、歴史にもっとも近い時代にまとめられた唯一の歯科医人伝の文献である。わずか200冊しか配付されなかったため忘失されたが、同書は、わが国の歯科医人の列伝の底本として再評価されるべきである。

歴史家の偏向

日本大学歯科の山田平太は、昭和9年(1934)、『日本歯科医学史』⁹⁾172ページを出版した。同書は、上古から江戸時代、明治時代の後期45年までのあらましを編年体で記述した。

明治20年当時は、歯科医術開業免状を受けた者はわずか80名足らずで、従来医や入歯歯抜口中療治者が混在していた。彼らのリーダーは手術手技を門外不出とし、自らの私塾に教えを乞う門弟を固めて一派をなした。「調査資料」によれば、高山一門30余名、小幡一門25余名をはじめ、伊藤順二一門、神翁金齋一門、西村輔三一門、松下良貞一門等々があった。各派は、互いに排斥しあい糾合することはなかった。

山田は、明治30年代になると、秩序ある教育を志す学徒のために、実体ある私立歯科医育機関が増加したと記す。明治33年、高山歯科医学院を引き継いだ血脇守之助の東京歯科医学院について詳述し、同38年の京都歯科医学校、同44年の広島歯科医学校、大正4年の東京大学歯科講座に言及した。

そのあと、共立歯科医学校に関して詳述する。「日本歯科教育会は、医術開業試験規則の改正により学科目増加し、益々秩序的教育の必要を感じ、昼間余暇なき者の教育機関として歯科医学校を設立せり。これ共立歯科医学校の起りし所以にして、麹町区大手町商工中学校内に於て四十年七月二日開校式を挙げ…」と記した。共立歯科医学校は昼間部・夜間部を開設したので、夜間部のみというのは誤りである。それに加えて、ここには肝心の設立者中原市五郎の名前が見当らない。

さらに、6年後の『歯科医事衛生史前巻』では、序説・法制・団体・教育・衛生・器材の諸編を担当した山田は、二十日会、日本歯科教育会、共立歯科医学校に関しては意図的に無視して一言半句も触れていない。筆者が拘泥するのは、歯科医学史上、東京歯科医学院(のち東京歯科医学専門学

校)と、共立歯科医学校(のち日本歯科医学専門学校)の創立が、今につづく歯科医師養成の源流だからである。明治40年から昭和20年までを対象とした『歯科医事衛生史後巻』にも、この事由は全く触れられていない。

顧みれば、「前巻」の発刊された昭和15年当時、明治20・30年代の派閥の時代から、同40年代以降は私立歯科医学専門学校による学閥の時代に移っていた。とりわけ東京歯科医専と日本歯科医専は、学校のある地名に因んで、三崎町、富士見町と呼ばれ、歯科界を二分する熾烈な党争を繰りひろげた。両校が激しく競い合ったから、わが国の歯科界は全力疾走した、という見方も根強い。その真只中であって、歴史家の山田は、歯科医学史の編纂に際し、残念ながら一方の学閥に偏向し、通史の随所にその瑕疵(かし)を残した。

歴史家の過褒

一方、『歯科医事衛生史前巻』の外国人歯科医と私塾の2編を担当した今田は、明治前期の先人を外人系、留学系、伝統系に分類した。外人系として、イーストレーキはじめ5氏の門下17名を挙げた。留学系は明治初年から末年まで43名、伝統系は従来家(鑑札営業者)も含めて8名である。この今田の区分により、混沌としてまとまりのなかった先人たちが整理され、以後、後世史家はその分類に従うことになる。

前後するが、「調査資料」から10年後の昭和12年(1937)、今田は、『W・C・イーストレーキ先生』¹⁰⁾225ページ、同15年には相次いで、『小幡英之助先生』¹¹⁾257ページ、『開国歯科医人伝』¹²⁾188ページを出版する。彼は、イーストレーキと小幡英之助に心酔し、彼らの故事来歴を丹念に調査し、家譜、家族、育ち、史蹟、追憶から人物像を明らかにした。

それによってイーストレーキと小幡は、過分にも、わが国の近代歯科の濫觴期(らんしょうき)における偉大な先覚者として顕彰された。また、明治初期に来航した外国人諸氏は、わが国の遅れた歯科を啓蒙した恩人として、図らずも、わが国の近代歯科の首席に奉られた。

実際には外国人諸氏は、イーストレーキは2度の来日で日本滞在15年余、他の5氏は3~7年の滞在に過ぎない。その間、彼らは必ずしも歯科医

業に専念せず、博物収集、語学教師、教義伝道等を行っていた。また、門人教育は彼らが雇った通訳を介してであったから、彼らがどれだけ日本人門人（また門人と称する者）を指導できたか疑問である。

当時、歯科医師免許がなくても、外国人が患者を治療することは可能であったとはいえ、6名のうち来日時に故国の歯科医学校で近代歯科医術を修め、卒業による DDS 称号を有していたのは、エリオット、H・M・パーキンスの二人だけである¹³⁾¹⁴⁾。イーストレキは一時帰国後に、オハイオ大学歯科に学んだといわれるが、その修学履歴については不詳である。彼らが近代歯科医術の担い手として、はたして、どれだけのレベルにあったか疑問である。

一方、明治時代初期は、江戸時代からの口中科、口科、口歯科が用いられた。エリオットに師事した小幡は、Dentistry= 歯科を修めたという強い自負があった。Dentistry は、ラテン語の dens (歯) と英語の ist (する人) と ry (業) の造語である。彼は、医術開業試験を委託されていた東京医学校 (のち東京大学医学部) に、初めて“歯科”の名称を以って専門試験を出願し、明治 8 年 (1875) に初の歯科医術開業免許 (当時は業務免許) を取得した。

それ以降、歯科はトレンドイなネーミングとして、口中科に代わって急速に滲透していった。そして 3 年後には、法的根拠を有する公称として認知される。当時、口中科・口科であったにも拘らず、小幡は“口腔”という認識を欠いていた。彼のスタンドプレーのために、それから 137 年間、歯科医師は、この局所のみをさす狭小な名称に悩まされ続けることになる。

現在においても、とかく“口腔”を排斥され、“歯科医師は歯だけ”という患者国民の誤解と偏見から解き放たれていない。結果論になるが、せめて“口歯科”であったら、歯科医師の業務範囲を表現する適切なネーミングとして、患者国民に膾炙 (かいしゃ) していたであろう。小幡の功罪は相半ばするが、筆者は、この一事を以ってしても、彼を明治期の第一人者とは認めがたい。

今田は、明治期の先人を恣意的に過大評価して、歯科医師の歴史を輝けるものに昇華させることを期した。そのため、彼は先人たちに感情移入し、

その筆致は勢い度を越して、実像を大きくふくらませて誉め称えた。これは、往々にして歴史家が陥る陥穽 (かんせい) である。

歯科医学史の先史時代

本来、歴史に偏見と過信は避けがたいが、歴史家は、あくまで史実に反してはならない。山田の偏向と今田の過褒は、史実は客観的に過不足なく記録し、客観的に過不足なく評価すべきことを、私も後世史家に戒めている。

以上、わが国の歯科医学史の書誌 (表) を検証すると、歯科医学史において明治時代前期は、文献のほとんど残っていない先史時代として位置づけられる。旧歯科医師法の制定された明治 39 年 (1906) から、斯界の有史時代が始まるのである。

(本文中の旧漢字、片仮名表記は、適宜、新字体、平仮名に直した。)

文 献

- 1) 奥村鶴吉：歯科医学史，1917.
- 2) 川上為次郎：歯科医学史，1931.
- 3) Guerini, Vincenzo : A History of Dentistry, 1909.
- 4) 山崎 清：歯科医史，1940.
- 5) 日本歯科医師会：歯科医事衛生史前巻，1940.
- 6) 大日本歯科医学会：歯科沿革史調査史料，1926.
- 7) 樋口輝雄：小幡英之助の受験書類について，歯科医史 27 (4) : 237-255, 2008.
- 8) 高山紀齋講演，神村信吾筆記：歯科学術沿革史，高山歯科医学院講義録，1892.
- 9) 山田平太：日本歯科医学史，1934.
- 10) 今田見信：W・C・イーストレキ先生，1937.
- 11) 今田見信：小幡英之助先生，1940.
- 12) 今田見信：開国歯科医人伝，1940.
文献 10)~12) は、1973 年刊行の『今田見信著作集』I~III に収録された。
- 13) Proceedings of Society, Philadelphia Dental College, Dental Cosmos 12 : 205, 1870.
フィラデルフィア歯科医学校の卒業式は 1870 年 2 月に挙行され、William St. G. Elliot ら 41 名に DDS 称号が授与された。
- 14) Proceedings of Society, Boston Dental College, Dental Cosmos 11 : 418-419, 1869.
ボストン歯科医学校の第 1 回卒業式は 1869 年 6 月挙行、Horace M. Perkins ら 4 名の卒業生は、参列者の前で各自の研究テーマを口演した。

著者への連絡先：樋口輝雄

951-8580 新潟市中央区浜浦町 1-8
日本歯科大学新潟生命歯学部内
医の博物館
Tel. 025 (267) 1500 ex. 109

表 歯科医学史の書誌

発行人	著者	書目名	副題等	頁数	発行者・所
1876(明治9)	American Academy of Dental Science	A History of Dental and Oral Science in America	復刻版 (Amazon 等のオンデマンド印刷)	270p	Samuel S. White ※
1892(明治25)	高山 紀斎 (訳)	齒科学術沿革史 (邦題)	高山齒科医学院講義録	333p	高山齒科医学院
1896(明治29)	Geist-Jacobi, G. P.	Geschichte der Zahnheilkunde		254p	Tübingen Pietzcher
1900(明治33)	Lemerle, L.	Notice sur l'Histoire de l'Art Dentaire		221p	Bureaux de l'Odontologie
1909(明治42)	Guerini, Vincenzo	A History of Dentistry	from the most ancient times until the end of the eighteenth century	355p	Lea & Febiger
1909(明治42)	Koch, C. R. E. (編)	History of Dental Surgery		2vols	The National Art Publishing Company
1922(大正11)	Taylor, J. A.	History of Dentistry	A Practical Treatise for the use of Dental Students and Practitioners	238p	Lea & Febiger
1927(昭和2)	Boissier, Raymond	L'Evolution de l'art dentaire de l'Antiquité à nos jours		206p	Editions de la Semaine Dentaire
1948(昭和23)	Weinberger, B. W.	An Introduction to the History of Dentistry		2vols	C. V. Mosby Company
1973(昭和48)	Hoffmann-Axthelm	Die Geschichte der Zahnheilkunde			
1985(昭和60)	本間 邦則 (訳)	齒科の歴史 (邦題)		455p	クイテンテッセンス出版 (株) ※
1985(昭和60)	Ring, Malvin E.	Dentistry: An Illustrated History			
1991(平成3)	谷津三雄, 森山徳長, 本間邦則 (訳)	図説・歯科医学の歴史 (邦題)		320p	(株) 西村書店 ※
歯科医学・歯科医療の通史 (編年体による叙述)					
1917(大正6)	奥村 鶴吉	歯科医学史	「歯科学講義」第21巻	32p	東京齒科医学専門学校
1931(昭和6)	川上為次郎	歯科医学史	復刻版・科学書院 (1988)	704p	(株) 金原商店 ※
1933(昭和8)	山田 平太	日本齒科社会史	「日本齒科文化史」第1冊	204p	日本齒科文化史刊行会
1934(昭和9)	山田 平太	日本齒科医学史	「日本齒科文化史」第2冊	172p	日本齒科文化史刊行会
1940(昭和15)	日本齒科医師会 (今田, 山田ら稿)	齒科医事衛生史前巻	近世齒科医術の輸入より明治39年齒科医師法公布に至るまで	592p	日本齒科医師会
1940(昭和15)	山崎 清	齒科医史		182p	(株) 金原商店
1949(昭和24)	川上為次郎	齒科医学史提要		282p	国際出版 (株)

- 1958(昭和33) 日本歯科医師会
(山田平太 稿) 歯科医事衛生史後巻 720p 社団法人日本歯科医師会
- 1964(昭和39) 日本学士院(編),
山田平太(稿) 明治前日本口齒科史 77p 日本学術振興会
- 1969(昭和44) 日本歯科医師会 日本歯科医事衛生史第1巻 592p 社団法人日本歯科医師会
- 1971(昭和46) 本間 邦則 歯学史概説 124p 医歯薬出版(株)
- 1973(昭和48) 青島 攻 これだけはぜひ知ってほしい歯科のあ
ゆみ 555p ABC企画
- 1975(昭和50) 正木 正 新編歯科医学概論 496p (株)医歯薬出版
- 1984(昭和59) 日本歯科医師会 日本歯科医事衛生史 第2巻
(関 敏 稿) 811p 社団法人日本歯科医師会
- 2001(平成13) 田中 克憲 医学史歯科医学史を求めて 344p (株)長崎文献社
- 2009(平成21) 石井拓男, 渋谷 敏,
西巻明彦 スタンダード歯科医学史 115p (株)学建書院 ※
- 一次資料を収録した歯科史料集**
- 1976(昭和51) 谷津 三雄 歯学史資料図鑑 526p 医歯薬出版(株)
- 1978(昭和53) 中原 泉, 新藤恵久,
本間邦則 浮世絵に見る歯科風俗史 163p 医歯薬出版(株)
- 1980(昭和55) 中原 泉, 新藤恵久,
本間邦則(訳) Manners and customs of Dentistry in
Ukiyoe 156p 医歯薬出版(株)
- 1981(昭和56) 山田平太, 新藤恵久 歯の歴史図鑑 256p 日本医療文化センター
- 1982(昭和57) Bernald S. Moskow Art and the Dentist
藤村 英子(訳) 世界の絵画と歯科風俗史(邦題) 315p (株)書林
- 1987(昭和62) 谷津 三雄 医歯薬史雑録 272p 医歯薬出版(株)
- 2005(平成17) 本平孝志, 内藤達郎,
安藤嘉明 歯科の歴史への招待 173p クイテンテックス出版(株)
- 2009(平成21) 大野爾英, 羽坂勇司 目で見ると見る 364p わかば出版(株) ※
- 日本と西洋の歯科に関する歴史
中心に
- 江戸と明治期, 16~20世紀の資料を
歴史遺産と史料を求めての旅
- 目で見ると見る 歯学史
- 高山先生銅像建設事務所
社団法人大日本歯科医学会
文陽社
- 28p
106p
410p
- 高山先生銅像建設事務所
社団法人大日本歯科医学会
文陽社
- 28p
106p
410p

歯科医学・歯科医療の先人たちの伝記

- 1911(明治44) 奥村 鶴吉 高山齋先生小伝 28p 高山先生銅像建設事務所
- 1926(昭和元) 高橋直太郎(編) 歯科沿革史調査資料 106p 社団法人大日本歯科医学会
- 1936(昭和11) 島 洋之助 富士見の慈父 410p 文陽社
- (岡垣義忠)

1937(昭和12)	今田 見信	W. C. イーストレーキ先生	複製版・今田見信著作集 I (1973)	225p	歯苑社 (医歯薬出版)
1940(昭和15)	今田 見信	小幡英之助先生	複製版・今田見信著作集 II (1973)	257p	歯苑社 (医歯薬出版)
1940(昭和15)	今田 見信	開国歯科医人伝	複製版・今田見信著作集 III (1973)	188p	歯苑社 (医歯薬出版)
1968(昭和43)	長尾 優	島峯徹先生		271p	医歯薬出版 (株)
1979(昭和54)	松宮 誠一	血脇守之助伝		394p	学校法人東京歯科大学
1984(昭和59)	岡本 清櫻	歯界遍歴六十年		646p	医歯薬出版 (株)
1986(昭和61)	中原 泉	フォシヤール探求	“歯科医学の父”の実像に迫る!	254p	(株) 書林 ※
1987(昭和62)	中原 泉	歯科医学史の顔		272p	(株) 学建書院
1991(平成3)	中原 泉	麻醉法の父ウエルズ		105p	(株) デンタルフォーラム
1991(平成3)	中原 泉	伝説の中原實		326p	クイーンテッセンス出版 (株) ※
1992(平成4)	宮下 慶正	歯科界の巨星 中原市五郎の生涯		162p	ほおずき書籍 (株)
1995(平成7)	榊原悠紀田郎	歯記列伝		270p	クイーンテッセンス出版 (株) ※
2005(平成17)	榊原悠紀田郎	続歯記列伝		354p	クイーンテッセンス出版 (株) ※

歯科医学史に関わる挿話集

1928-31 (昭和3-6)	小林富次郎 (編)	よはひ草	歯に関する趣味の展覧会記念出版	全6巻	小林商店広告部
1977(昭和52)	青島 攻	物語日本歯学史		156p	(株) 書林
1981(昭和56)	榊原悠紀田郎	歯の星のとき		422p	(株) 日本歯科評論社
1981(昭和56)	原 三正	お歯黒の研究		269p	人間の科学社
1985(昭和60)	杉本 茂春	歯と顔の文化人類学		228p	編集工房ノア
1987(昭和62)	Woodforde, John 森 隆 (訳)	The Strange Story of False Teeth エピソードでつづる義歯の歴史 (邦題)		174p	財団法人口腔保健協会 ※
1991(平成3)	神津 文雄	民俗への旅 歯の神様		218p	銀河書房
1993(平成5)	長谷川正康	歯科の歴史おもしろ読本		269p	クイーンテッセンス出版 (株) ※
1998(平成10)	森 納	歯の民俗	民間信仰・俗信・くすり	188p	綜合印刷出版 (株)
2000(平成12)	磯村寿賀人	おもしろい歯のはなし 60話		205p	(株) 大月書店
2001(平成13)	斎藤 安彦	おもしろ歯の博物誌		158p	(株) 創英社
2008(平成20)	飯塚 哲夫	歯科医師とはなにか	歯科医師の歴史	144p	(株) ストマ
2010(平成22)	水谷惟紗久	18世紀イギリスのデンティスト	歯科医療の起源, そして「これから」	222p	(株) 日本歯科新聞社 ※

部門史および業界史

1935(昭和10)	小林商店 (編)	歯磨の歴史		944p	小林商店 (ライオン (株))
1966(昭和41)	長尾 優	一筋の歯学への道普請	東京医歯科大学のあゆみ	244p	医歯薬出版 (株)

1977(昭和52)	今田見信, 正木 正	日本の歯科医学教育小史	歯科大学(歯学部)と医科大学(医学部)口腔外科学教室その他の今とむかし	237p	医歯薬出版(株)
1977(昭和52)	業界史編集委員会(編)	日本歯科業界史(器械編)		254p	日本歯科企業協議会
1979(昭和54)	中原 泉	現代医歯原論	歯科医師へのアプローチ	216p	(株)書林
1981(昭和56)	中原 泉	現代医歯診療圏	Grenzgebietの構図	224p	(株)書林
1983(昭和58)	成田 令博	抜歯の文化史	「OHブックス」3	205p	財団法人口腔保健協会
1984(昭和59)	丹羽 源男	楊枝の今昔史		164p	(株)書林
1988(昭和63)	加藤 増夫	歯の塚探訪		119p	医歯薬出版(株)
1989(平成元)	榊原悠紀田郎	社会保険歯科医療小史		262p	財団法人口腔保健協会 ※
1990(平成2)	榊原悠紀田郎	学校歯科保健史話		330p	医歯薬出版(株)
1990(平成2)	加藤 増夫	近代歯学史と神奈川	(付)財団法人口腔保健協会の歩み	144p	神奈川新聞社出版局(印刷) ※
1991(平成3)	榊原悠紀田郎	公衆歯科衛生活動略史		111p	財団法人口腔保健協会
1992(平成4)	加藤 増夫	漢方歯学と麻酔		334p	医歯薬出版(株)
1993(平成5)	長谷川正康	歯の風俗誌		195p	時空出版(株)
1994(平成6)	新藤 恵久	木床義歯の歴史	世界に先駆けた日本の職人芸	186p	(株)デンタルフォーラム
1997(平成9)	榊原悠紀田郎	歯科衛生士史記		270p	医歯薬出版(株)
1998(平成10)	稲葉 修	楊枝から世界が見える	楊枝文化と産業史	284p	(株)冬青社
2000(平成12)	笠原 浩	入れ歯の文化史	最古の「人工臓器」	230p	(株)文芸春秋
2001(平成13)	竹原直道, 坂下玲子, 藤田 尚, 松下孝幸, 下山 晃	むし歯の歴史	または歯に残されたヒトの歴史	255p	(有)砂書房 ※
2001(平成13)	山賀 禮一	口腔衛生予防がわかるお歯黒のはなし		287p	(有)ゼニス出版
2002(平成14)	榊原悠紀田郎	歯科保健医療小史		190p	医歯薬出版(株) ※
2003(平成15)	榊原悠紀田郎	公衆歯科衛生略年表		143p	公衆歯科衛生を伝え聞く会
2010(平成22)	長谷川正康	江戸の入れ歯師たち	木床義歯の物語	196p	一世出版(株) ※

注記 1) わが国の歯科医育機関(歯科大学・歯学部), および都道府県歯科医師会からは貴重な一次資料を収録した記念誌(周年誌)が多数発行されているが, 本表には原則として, 出版社から刊行された書籍(市販書)を掲出した。したがって本表では「通史」「伝記」欄を除き, 自費刊行物やパンフレット類, 雑誌掲載論文は収録していない。また, 書名に「歯」を冠していても, 歯科医学と歯科医療の歴史に論及した書籍に限ることとした。なお, ※印は, 現在一般書店でも購入できる書籍である。

2) 本表に掲出した和書のほとんどは, 国立国会図書館で閲覧が可能である。特に稀覯書である『歯科学術沿革史』(高山紀斎), 『高山紀斎先生小伝』(奥村鶴吉), 『歯科医学史』(奥村鶴吉), 『歯科沿革史調査資料』(高橋直太郎)は, 国立国会図書館の近代デジタルライブラリー(<http://kindai.ndl.go.jp/>)からダウンロードして閲覧複写できる。